

# 新・下野市風土記

## 憶良と秋の七草



下野市教育委員会 文化財課

今回は、70代半ばを過ぎた憶良が、10数年にわたる持病に苦しみながらも、このまま名も残さずに朽ち果ててしまってよいものか？ という苦悩とともに、自分を奮い立たせる歌を詠んでいたことについて記しました。

今回は、類まれなる歌人であった憶良の、他の作品のいくつかに触れていきます。

### 家で子どもが泣いている

「憶良らは今は罷らむ子泣くらむそれぞれの母も我を待つらむぞ」

訳「憶良はそろそろこの宴からお暇しましょう。家で子が泣いているでしょうし、それにその母(私の妻)も待っていることでしょう」

60~70歳の憶良が詠んだ、ユーモアたっぷりの歌です。すでに60代以上の憶良ですから、「家で子が泣いている」という内容が、真実かどうかは定かではありません。妻子についてはフィクションで、宴を中座するためのウィットに富んだ言い訳だったのかもしれない。

### 旅人と憶良

憶良が筑前守として派遣されていた九州に、大宰帥(大宰府の長官)として赴任してきた大伴旅人は、着任早々妻を亡くし、悲しみに暮れて歌を詠みました。

「世の中は空しきものと知る時しいよよますますかなしかりけり」  
訳「妻に先立たれて世の中は空しいものをつくづく思い知ったが、益々悲しさは増すばかりである」

憶良は、亡くなった人を追悼する挽歌を送っています。  
「妹が見し棟の花は散りぬべし 我が泣く涙はまだ干くなくに」  
訳「生前、妻が見た棟の花(梅檀の花)はもう散ってしまっただろうか。私の涙はまだ乾かないのに」

このときの歌のやり取りから、歌人としての旅人と憶良の付き合いが始まったといわれています。

この2年後、旅人の邸宅で開催された宴会の席で、旅人と憶良らで梅花に関する歌を複数詠み、そのうちのひとつが新元号「令和」の元になりました。

「時に、初春の令月にして、気淑く風和ぐ」  
訳「折しも初春の正月の佳き月で、気は良く風は穏やかである」

『新編日本古典文学全集』小学館から引用

### 秋の七草

秋の七草の始まりが、万葉集に収められた憶良の歌の2首だったことをご存知ですか？

「秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七草の花」

巻八、(一五三七)

「萩の花 尾花 葛葉 瞿麦の花 女郎花 また 藤袴 朝貌の花」

巻八 (一五三七)

2首目の最後に登場する朝貌の花は、朝顔、昼顔、木槿、桔梗のどれかだといわれています。植物学者の牧野富太郎博士は「憶良の時代には日本に朝顔は未だ伝わっていないことから、現代の朝顔とこの朝顔は異なり、平安時代の漢和辞書である『新撰字鏡』では、憶良が詠んだ朝貌は桔梗を指す」と指摘しています。

### 万葉集

万葉集には、憶良や旅人などの役人が詠んだ歌だけでなく、他にも、東国から九州へ赴任した名も無き防人達が詠んだ歌や、雑歌(宴や旅行に関する歌)、相聞歌(男女の恋愛の歌)、挽歌(死を悼む歌)まで、幅広い身分の人々が詠んだ歌が、数多く収録されています。

